伊勢參宮名所圖會

二

伊勢參宮名所圖會巻之二

目録

勢田橋 ○古戦場 ○頓宮旧跡 ○龍神祠 ○依羽古祠
建部明神 社務 大夫新田月淪池
野路玉川 草津驛 栗の化石
鞍嵜八幡 立本明神
岡村 日川
灰塚山 狗 ○手原 ○小野
善光寺 上野 ○林
石部驛 吉長吉姫の社 落合川
針村 日川 里夏見 ○吉永 ○三雲 山夏足 ○田川
馬場先八幡 水口驛
栗太郡 ○日野 ○栗太樹
老上川 玉水の池
勢田驛
樫原
乳母ヶ餅
常善寺
坊袋
山田矢橋
三上山 ○榊山
伊勢落 ○金ゴ
草津川 ○下新屋敷
阿星山 東寺 西寺
横田川 梵字岩 烏帽子岩
川面 日池
梅の本 是齋
大宮社
甲賀郡 日三郎左衛
拂子袋 ○平松
泉 ○北脇 ○林口
大徳寺

大園寺　城山
栗林。彩流。小里　今在家
弁形石。岩神
大野。德原　市場。糸野
田村明神　田村川
猪鼻　山中。聚楽寺
鈴鹿山。三神山。坂本。田村社
橋弁天　伊勢海硯
金藏院　小女溪
沓掛　橋本
權現山　四軒茶屋
茶禍淵　一瀬日川
御影嫁塚　清見原天皇故事

正源寺　布引山
稲川。清泉碑　瀧樹明神社。伊佐川
松尾　松尾川　土山駅。一里山
田尻野　猪鼻明神　解脱坂。蟹塔
榎澤　江州勢州境
鈴鹿社　日光宮　鈴鹿川
岩窟觀音　坂下驛
法安寺　燒地藏
一里山　朝日弁天
筆捨山　羽黒山奇石
大黒石。恵比須石　関驛
長持石。ふくべ石　関地藏　日用眼活
鈴鹿関跡

石ぞ揺　久我白石明神
和琴橋　川上瑞光寺　拝殿
追分　関川
天神社　日森　観音堂
片淵城趾　高野尾
土岐百塚　窪田
空也堂　坂部
一身田高田專修寺
大乃己所神社　大部田

城趾　三日城
湯津盤　日森　清岸山福藏寺
古驛　摘原
中縄　椋本
豊久野　鈔掛松　野崎
光明山安養寺　六大院
例幣洌齋塚　一の宮
三彩茶屋　中野
小丹浦

勢田の橋

風雅集

貢ものの
船に
そなへける
東
宗乃

勢田の
長橋
朽もせぬ
ながらへて
兼盛

発句

五月雨
かくれぬ
ものや
瀬田乃
橋

勢田橋 大橋長九十七間幅七間 小橋長廿七間幅四間 中島の間十五間合長百九十六間 志賀栗本の境に跨る

長橋唐橋又くぐゐきの橋 近江国中ゝ水ことぐを湖に入て其末流多く聚て

宇治川を経て淀川に入る橋の盪觴未詳

或説に雄略天皇九年壬申夏百済化来の者に能く長き谷川の流を知りて橋を渡を工あり

即本曾撥其余百八十橋を造りしむ時のへくれを学て踏る橋とゝ此書に見ゆ未詳○大日本史に天武天皇大友の皇

ゝろうと惠日堂の秘に又へいう去ゝとゝ此書に見ゆ未詳○大日本史に天武天皇大友の皇

子の戦に潜将進至淑田帝悉衆陣橋西撤板拒之云ゝ。此舟既に板橋あり しかゝるに

武書云後一条院万寿元年に焼亡を其後宇多院弘安年中忍性律師造之云ゝ又日甘帝寛文八年

二月橋の板二年自焼るゝ云 新古今集

撰の板も若むを斗ぬりて多く武代をあらんせたの長橋 匡房

勢田頓宮の舊跡 其地未詳これ頓宮都を出てこの所の頓宮に入らせ給ひ御額の擢をぬき

源氏榊 大ぶねとて何ものかはしらねどもかくされてさう本のさゝ

ふりをてく多くの船ども瀬ゝ川やそせ丸波に袖ぬるしや

○勢田古戦場 大友の皇子の軍やぶれ逃散 ○毛勢田おろ

の橋ぶ落して軍士の船ぶ迫しに奉る兼久記○中納言紀盛源氏と戦此所

○勢田城趾 川の東にあり山岡義作入道石阿弥城を

○勢田鰻 鯉 鮒 の歌名産多し

栗太郡 勢田川より 東をいう 首此地に栗の大木あり因て郡名とし

今首物語云むつ 近江国栗太郡に丹波国氏地あり 圍抱五百尋ありて本のえさ

枝のさしかゝりて多くの栗の実を結ぶ 其後朝廷より丹波国氏地の百姓に多く耕

霹靂大風にも不動 栗太甲賀三郡の百姓は本の義多くて耕

ゝ多くの其後老鏡と称ゝ其時の百姓の子孫今に其郡に多くと云

○燃る山物ぐるいに枝の本くつりさけぐ大木其地ゝみをれて郡名に号るゆその例

ね沢にもあり栗の実多く拾ひ今にも其実成堅なるゆあり里人これをスクモとゝ

栗太里 ○倭茂古祠 橋の右に両社あり 秀郷の孫橋の辺を通るに即下馬

龍神祠 いふ。これ此の流れを渡るに小祠あり 拝して去らざれば必而ふると

ゝ邑の医師を呼て祭ゝ多くの人ゝ俗説 ○勢田駅 古神宮勅使進発に会坂の関を出て近江往来に到勢田駅国

接伴寺渡の神 山城宇治橋伊勢宇治橋 司差供給次到野洲河渡を

蒲生氏の祖 ○建部明神社 ○石田 所祭大己貴命天武帝白鳳に年の勧請豊

葦原一宮の中の其一 神社啓蒙 武部大社一宮大神天日一命 一云

平治物語頼朝遠流の条下目盛安
大津ことやたびの人々そぞろめる上
せんに橋もなくて舟にてむかへの
ぶねにけふ公ろくてあ送り
なるあり社の又人なる紙つる神
そこ向ふ人のすけべ明神ゆ佐殿
さうに今ぬいけ清前ゆ通ぬ
り給のゆりをもゆさんそそぐ
まうるひる殿ふけ人ちづ
まりて盛安ゆ名ハ紙出
清出家ぬるべうさうよゆ
せ一ハ不思議の事ぬと
さうし給へ君ぬしゆうあて
八幡清ゆ参りて大床ゆ座と
盛安清供して石巻の上ゆ
伺ぬ参りしに十三斗の童
子ぬ前とゞして大床ゆ

ゆ世清人ぬ紙ぬ弓
やぬ引ぬて参り
ぬゆとやされ
ぬ御家殿の
内ゆけだる
御ぬゆそ清く
ぬさめゆけ
ぬ紙ぬ清ぬ
ぬ紙ぬ食せよゆ伝
ぬれば天ぬ抽紙ぬ御
ぬ参ぬ世ぬ行中ゆんと
ぬれハ行ぬひとゆ物中
ぬれぬゆと清ぬ参へて
清清ゆ一ハ六十六ぬ
ぬの一を西ゆのぬ
押ぬゆて参ぬ三ぬ
ゆてぬきぬて盛安ゆ抜き
世清ハ一を懐中ゆと紙と
なれハ一ハ下畧

野路玉川

ながをもえ
野路の
玉川
萩こえ
あさなあさな
波うち
月やどり
ゆく

俊報

所名

老上川

旧事記 二見西

○案孔四月中午日之古い大社之ゐる。

回祿後〜よりのち今い其形斗なり。

○**鴨の宮** 濁の池の中にあり 本地弁才天を祭

大蓑新田 ○月の淪池村の内にあり

所名

野路玉川 日本六ツの玉川の其一ツ此ゐ名を野路ふ御ゐるよう一所斗たへゐ名ゐ名ゐ水源

ありて萩い此ゐ名ゐ梅しゆうゐるゐゐ人いゐれを玉川と申ゆ。

又北一代集歌字名ゐ名ゐ野路の山道野路の篠原此国の名ゐともゐい程ゐ有り

○**玉水の池** 街道の右へあり。

捏本原

所名

草津驛 此歌中より中山道本曽海道の岐路あり即標石を立ゐ

千首

芝津より浜へ出る立ゐるれやそやめにて弘志賀れ〜舟 爲尹

乳母餅 紀建茂羅にして且玄浦藻山名所覽にて人の餅のる実い圖の傍へ記を

御曹とうせらるいもれ耶。けあるを夫金ゐらへ

○乳母が餅の形へ標石ゐ矢橋の舟場まで北へ町と記せり即紀の傍へ記あり

所名

山田矢橋の紀塲 何とも芝ゐ矢橋の舟場まで北へ町と記せり即紀の傍へ記あり

西小の浜より**石場**より紀て浜へ五十町の海上へ山田の浜

いもすま茅物を浜を 経景ゐ〜ん方臣賜布の嫁い布を長く敷ゐるゐ〜〜南へせたの橋

〜〜とゐ〜〜其余湖辺の眺望ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ

堀後百首

みなとゐるや矢橋の浜をもるゐをくそゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ

鞭崎寄八幡宮 矢橋町の傍へあり 兼昌

非ゐ三月四日 **祭祀三座中い神功皇后左い住吉右い高良也**

天武天皇白鳳四年 **大中臣清麿勅請之傳**曰建久元年十月二日頼朝

上洛之時此祠前を馬上ゐ〜〜鞭をゐてゐ〜ゐる祀ゐ〜ゐ浦人ゐ

乳母が餅

むかし近江源氏の二流佐々木左京大夫義賢と云ひし人
永禄十二年九月信長上洛の時義賢の嫡子承禎の城
の城主佐々木の家老蒲生賢秀の子なり賢秀より
せらるゝ所の幼児三歳なりし最期を終んで其乳母と
ともに逃隠しぬ乳母うつ事かゝ其子を抱き脇戸の
蔭より切ぬけ二条を潜むる月日さすれど
前のごとく牡丹大名家の幸抱るゝ
情さこそ
ぐ
小庵に用きけ
是は是と求る
往来の例、
乳母が餅とぞ
て
幼児は十三年の
門を入り
もろふ乃んで

失稿乃

師高綱家其子と偽
り云ひて產業式
神へ是服者を
用き近江の産某
と男子一
人の二人を九郎
の者
月流の中御
以て仕ゆせ
い高ひ和後さて
を乳母の好き屋
を
本某
多ひろ其の母尚自宗
の刀は物
乳母が和代後
きて
乳母が忠志
感涙
勝
涉

矢橋の

拾遺集月の夜舟とよ
物語に「むら〜湖水に
舟なしく渡海なり
しかし此舟の出来る由
来は志賀の造りて月
と花女みるるが美の
ちなる拙とうて〜
賭ひる男ある夜流
を流して毒〜今る
伝とつまん我ハ乙田
丸年経る楠の大木
ちるが其本と切て
舟を造り湖あ
のようひせんと木の
守より流るあを切
べしと宣りぬ拙ども
其舟を方人ようてもい
でうごくほど其舟家

脇内に拙〜こる男る
を木の字と長弦ひ
舟ハ母ズ〜と
其絵をとるふ〜〜法
家角ふ三て舟ハ
ろべ〜と恐ものとひを切
ふ〜〜ものさけ〜て矢あん
の如く舟の勢さんが出〜のま
ふいひ出く其ハ水
とげようとぞ

けの拙流ハ三年るの流ふ乙田
矢橋の浜〜舟の夜ハ魚
人なくとも月めさそひ
自ら舟もこがれ出〜ん
と志河ふ付くの戯作と
いふ人ふんも一説の真ふ
体人のく

君ゟ禄給ハバ八幡宮のよし答ふ大将急ぎ馬よりおりて偈仰あるこれゟ因て蹴落といへりと云

○按るに鞍ハ放ちて進るが古制之草津の駅首より轍を制して三津とを云神社に立木明神といへり是又放莫と神の変れるならんと

て云ひ合されバ昔此地に立たる放樹ありて終に神木とぞせしかの変なり草津産ハ竹の根なれども昔ハ放にて進りかるもみざしク今ゾそも産の鞍ハ放なり シヂブチ旧訓ぬて極とブチおなり

立木社 札の辻にあり 正一位立木大明神の額あり放を以て神の変樹とし春日明神

を祭るともいへり神子に社あり是郷中の搭にて良弁僧正の分深を勧明にせし

附言 烏丸光廣公の東行記云 やそしりそ草津と過るふかの道みちの辺に向ひたる家よりみえてやしき本源と森あり里人に問へバ春日勧請と申すといへり おかくして

神もましハりくとはしてまがふからん是も春日札藩とこそきけ

○私に曰此地の駅舎に茶屋某といへるあり其家今既に十三世にて家号を茶屋と称するもの地産の縁あるより似たり 姓を鈎井といふ是又古名之草津より守ゐまでを鈎井荘といへる所なれば其家に秘蔵する化石あり是ハ栗太郡の栗の大木のかれるものとぞこれに亜相中山君の記并に黄門日野君の詠を題る

裏

表

化石之譜見瑯邪代碑褊湖東石亭所録之雲根志品類有数属者近江國栗太郡草津驛舎長駒井某着持栗樹化石来而乞其名且記之方今獲審視之其高二尺餘斧削痕存而不煩琱琢自然成置崖層巒之形峭壁攢峰之勢尤足愛翫焉淵明栗里碑石之名何若栗本栗石之奇不啻悦目而適心而已不奪不崩永世宝傳應為一郡之霊鎮矣今名之以活人之享蓋栗子其功是以活人石丈宜襲其徳捨無窮因書以還之去

寛政甲寅晩秋　前権大納言藤原愛親

○近江國栗太郡なりの化石を

それうにさうぞしくりのむかし本ハいなからめりて世々につちせん　従一位資枝

常善寺 由緒有寺之縁起略之

草津川 村ちなるの小川なり ○下新屋敷○岡村 統て本高札の墳あり ○目川○坊袋○川面

川つし孔池 右の方にあり

附言 草津より石部までのあひだ九百ヶ村にもおよびて青花紙を制と是近江一國の名産にして月草の花をもて紙に染浸を其草の名俗にあをばなといふ是からしならもいふ

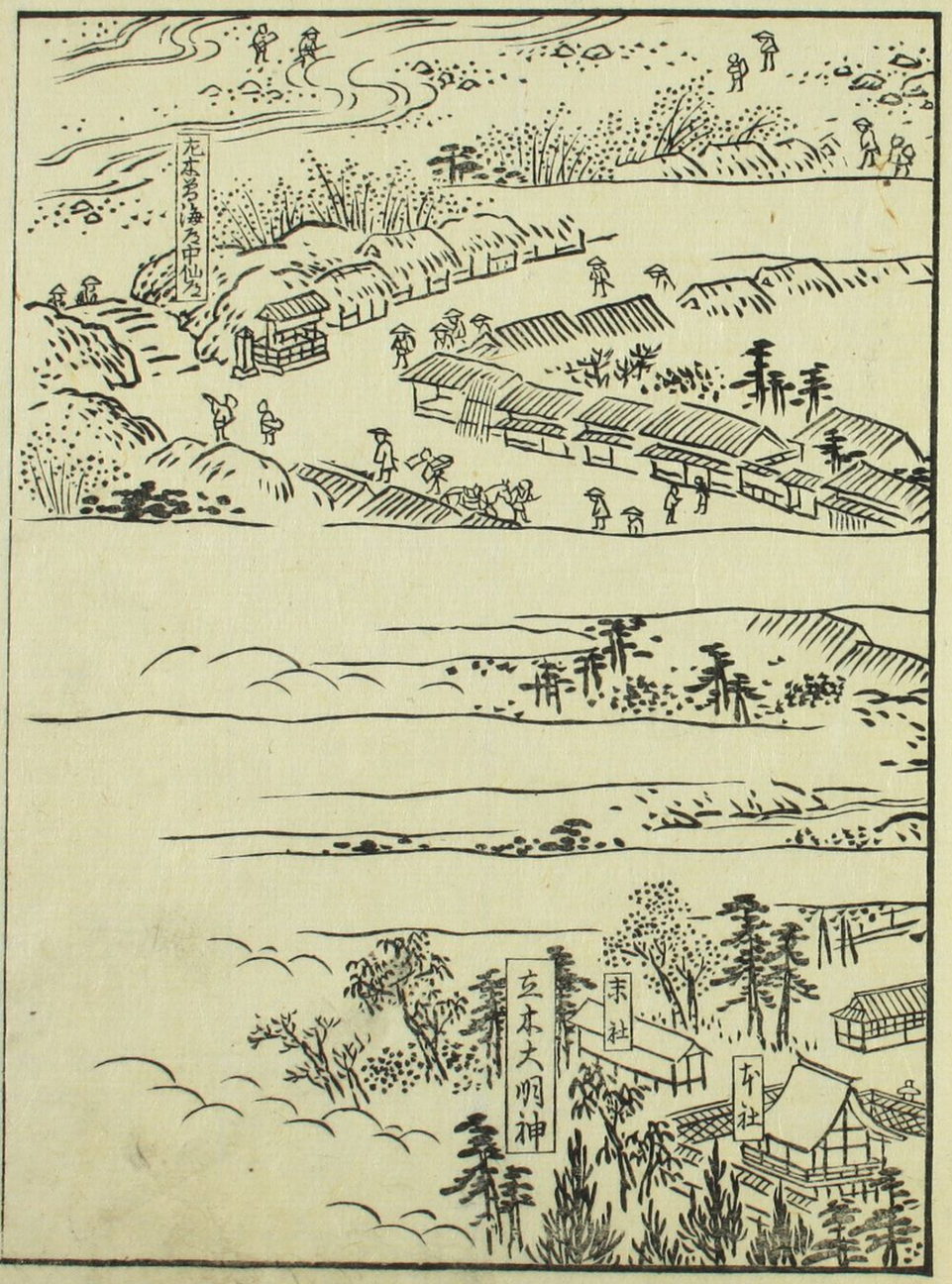
恵塚山 川面村の左の方なり見ゆる 上古の大栗の樹の枝葉を焼る灰のなれぬるりと云

鈎 足利義尚陣営の地之陣中にて卒去せられしとぞ 春径屋花氏傳を構せられしとぞ

手原 又俗手孕村ともいふ 稲荷の小祠あり 此村に昔手を孕むものありしとて手孕村とも云ども必しもいふべからず

既に山中一夕話といふ書にも鄞縣の賈人が妻まの賈にいふあとを出し後ふて伯氏がそを以て孫と称しと蔵して奉る産とせると記す

○小野


末社
末社
立本大明神

草津
立本大明神
末社

三上山　一名繁昌ともいへり　連山は桜山とも云ふ不尽有名なり

蓋須郡なりしこの山の
右まよりは見ゆるも所若狭ち
ふるのゝ山ぬるとびへく絶景
いりんかさなり〜似て三上山の
頂上三ツ峯ありてうづを
似たり
附言　伊勢物語七ケの大夫と
云る書よりは尾といこの
三上山の異名之其ゝ
ふるに似たれば
赤人哥
さゞ浪の三上の山も海なれや
月よりみれば塩尾のやま
今按ずるに其説
とちがいよ〜はづかし
なり〜ちよ此哥ふるを

有名なりしふるのふるの
てふ所ちらの似る所
後人の作哥にしく
よりしるべし山哥
赤人ちふも光宗は
七ケの大夫名ふ

富士御巡の記
物ひし
富士のね
遠き
俤を
をく
三上の
山のたゝ雲　竟孝法印

三上社　蒲生の三上
村まあり
祭邪天術影命　御宮の
尾釜にて炊き陶器を食ふ

梅の本　六地蔵村と昔大なる梅の本の古樹あり

是齋　和中散　元祖津田宗たち義原是齋と今に代々繼て梅の本薬屋あり

世に薬に和方にして医書を見る者に和中散の名高く世に流布して薬方に悪く異なり松永貞徳の和歌本草の侍なりとぞ医書を和中散の名高く世に流布して薬方に悪く異なり松永貞徳を大隅弥左衛門と名乗て和中散の名方なり○同村に定歳と名乗て剃髪の者格別なる名方なり此名

九品山善光寺　油素未詳　○上野　○林　○伊勢落　○金山　たの方にあり此名の御石は六十年来の

ここの辺を石庭と焼石なり

甲賀郡　并に甲賀三郎のなり○伊賀地者甲賀侍紙引て白酥砌天皇御宇信濃国更科明府の住人滋野家次男伯方三郎貞弘三男重内三郎兼家と云て勇名あり男子三人あり嫡を重内左衛門尉朝廷に仕て勇名あり兄弟三人数向せしに秋中兼家武勇をそれて城後の〻〻に徐代を見の三人其武功を惜んでふりき父実家〻二人の名を改め兼家と云て兼家〻〻きを合せて武威もまを〻〻強大に兼平の比相馬将門を亡ぼす者逐電をなすに和して近江国甲賀郡と賜る甲賀近江守と改む後伊賀守国を綱りの歳退治の時軍功を賞されて近江国甲賀郡一宮の裏に観音谷あり佐那具の居城を其墓は国阿祥郡

石部驛　後のちの人のちの人

万葉　白檀石邊山常石有命哉寐ん居

○代匠記曰拾遺集に採弓いそべの松とつゞけ詠る歌人麿と注せり又佐く本兼注に後ひしく人麿遠某と云ゆるかの兼注代を江の住人あり此辺も石の名所氏と云せり○去りも人麿に近江国の厨宮にて下らを〻〻集に又人麿ばかりこゝ紙ひなさ名石なりべし

日川

田くも田楽法師捧のさゝ
ゝ立付てとゝび
ゝる其形ゝ似
ゝゝゝゝて号
しなるべし

新勅撰夏

夏衣ゆくても涼し〜捧ろいそ人のふる松のしら風　家隆

石部社　石部の町の西方　延喜式廉塩上神社　甲賀郡八幡の内　上の社　吉姫大明神下社　吉姫大明神を祭る世記曰倭姫命阿佐加潟より渡りおちゝまとゝ多年連ホが祖宇賀之彦ぐる吉比女吉彦二人来りあいき其母吉姫地にの御田を耕ぐると月人壮士田を麻園を耕ぐると月人壮士田て来宮に由縁ある社なり　啓蒙

落合川　向雑川ともつゝ。東の村西の村の境より流れ出る水にて高今

▲阿星山東寺　長寿寺と云天台宗山門の末寺の基の佐至武天皇建立なり知天皇再建此寺開基よりこの寺拍あまくまり常楽寺とも云寺なる観音三尊の像あり本尊八幡後ぐり天台山門の末寺

▲阿星山西寺　阿星山西寺と云恵能の法會あり其名を孤性寺と云

西寺に正月十八日東寺に正月廿四日なり恵能の面芸至武の御代より伝りて其古俗なり

其数多〜栄もろ〜堪うり

拊子袋　○平松村　此村の右の方のふる〜松ともあり一山元三町余の間に多く唯松ばかりて其中ふる形一樹にして根下より数十軒を出て其幹勢なり

針村　入口の小川針川と云名あり家集の此川の名代なり　松葉集に伊勢国の名石とも拾ひ伊勢国

家集　わ〜衣ぬふ針川の岩柳の糸ようゝ紅葉も来よりう

里夏身　近江の名所の浦と云名不詳　但し此ところの名後考

躬恒

梅の木

雲若紫絵

芸文

あふみの清香を

紫ちる

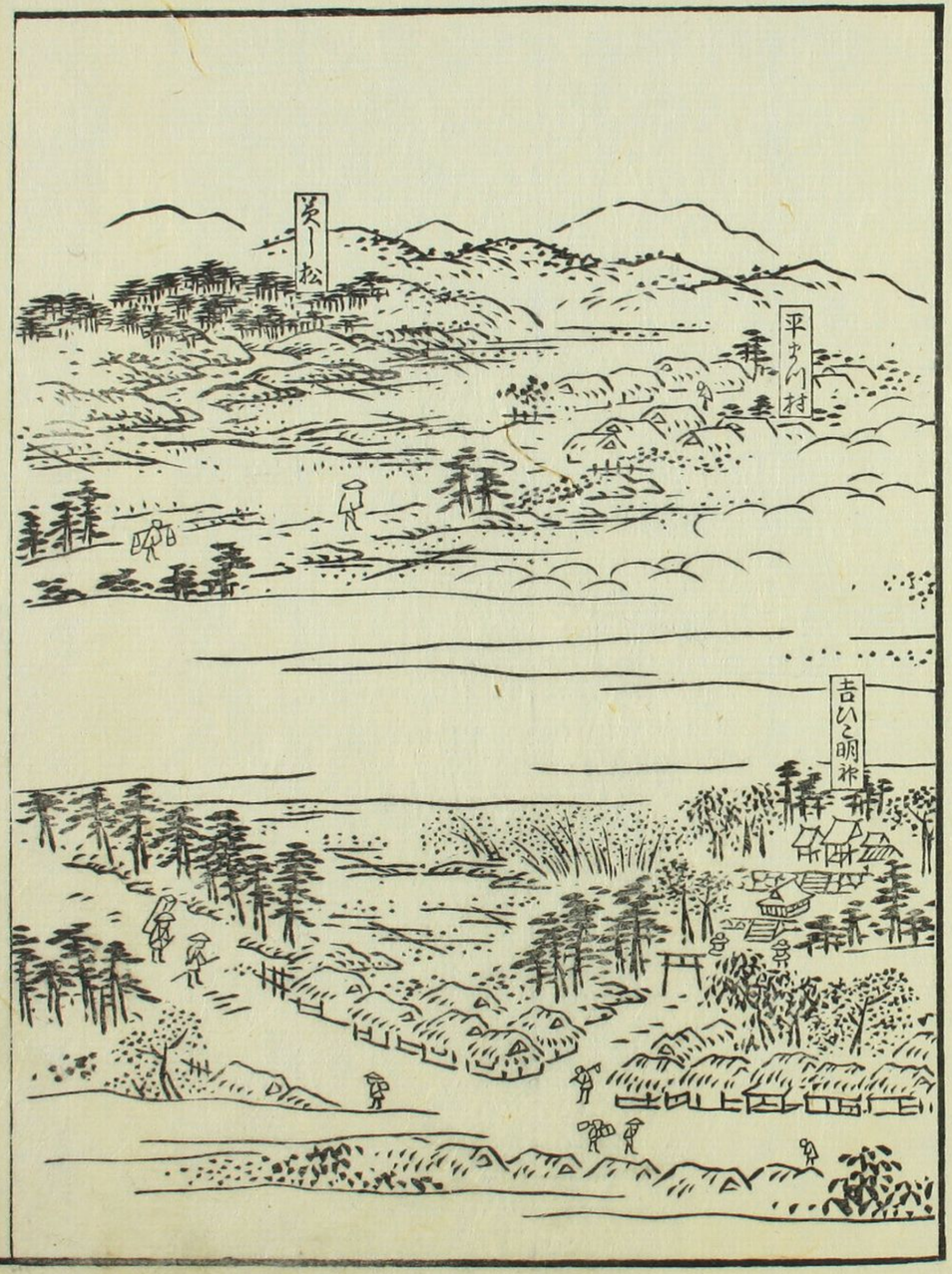
むめの木の

栄うり

信海

せきい

石部驛
宿のひがし
平松村の後の
押っよ英し
松とうあり
吉姫明神


英し松
平井川村
吉ひと明神

夏見の里
方丈記に紀水の流れいえのあるよあらぬとは
什木偶の紀水いえの水にして
ちろも蕨餅をとて
ず巻きをもぐろ柏
と枕草紙よりひ
起とゝいえん
かち

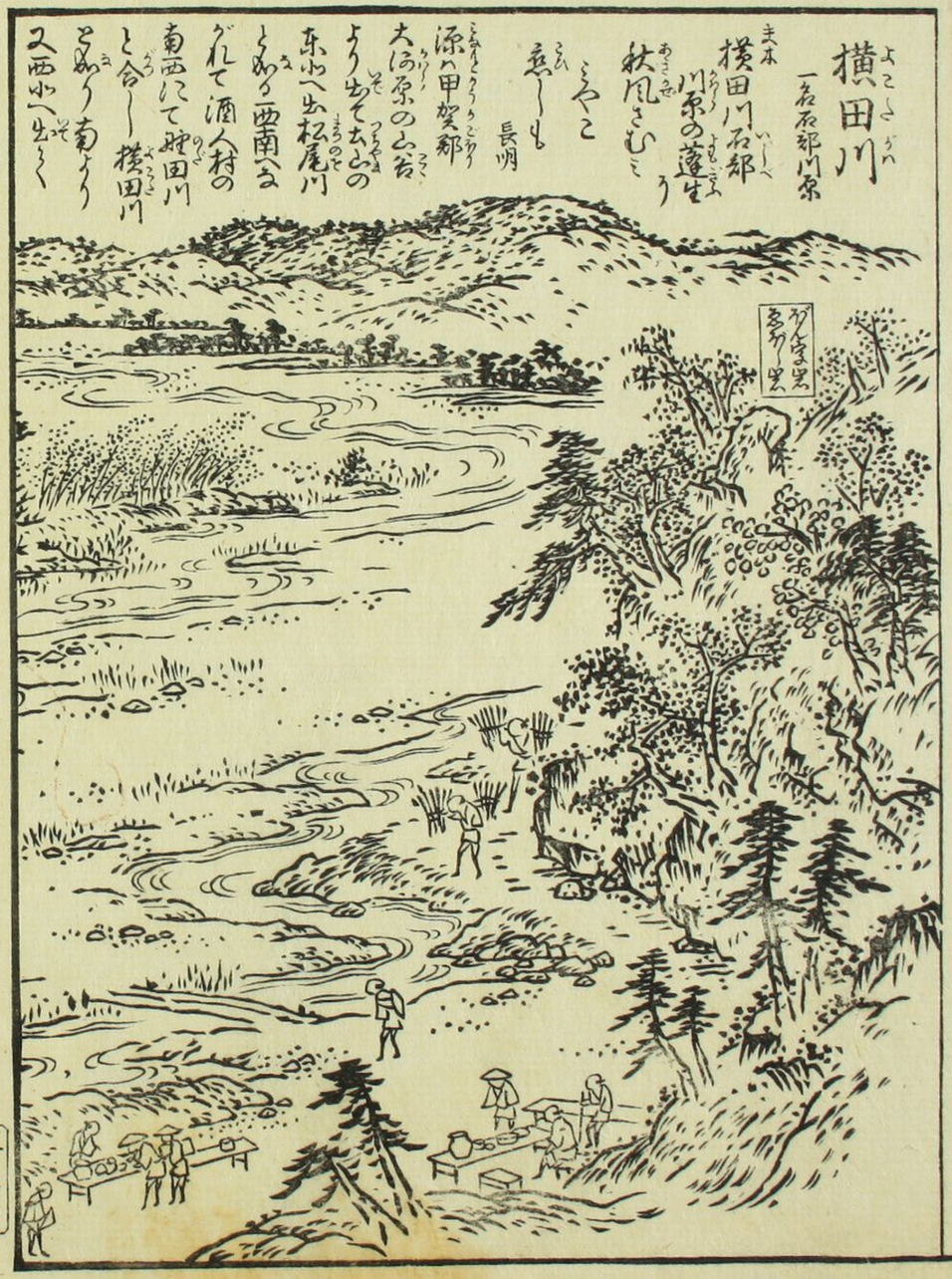
二本松

横田川

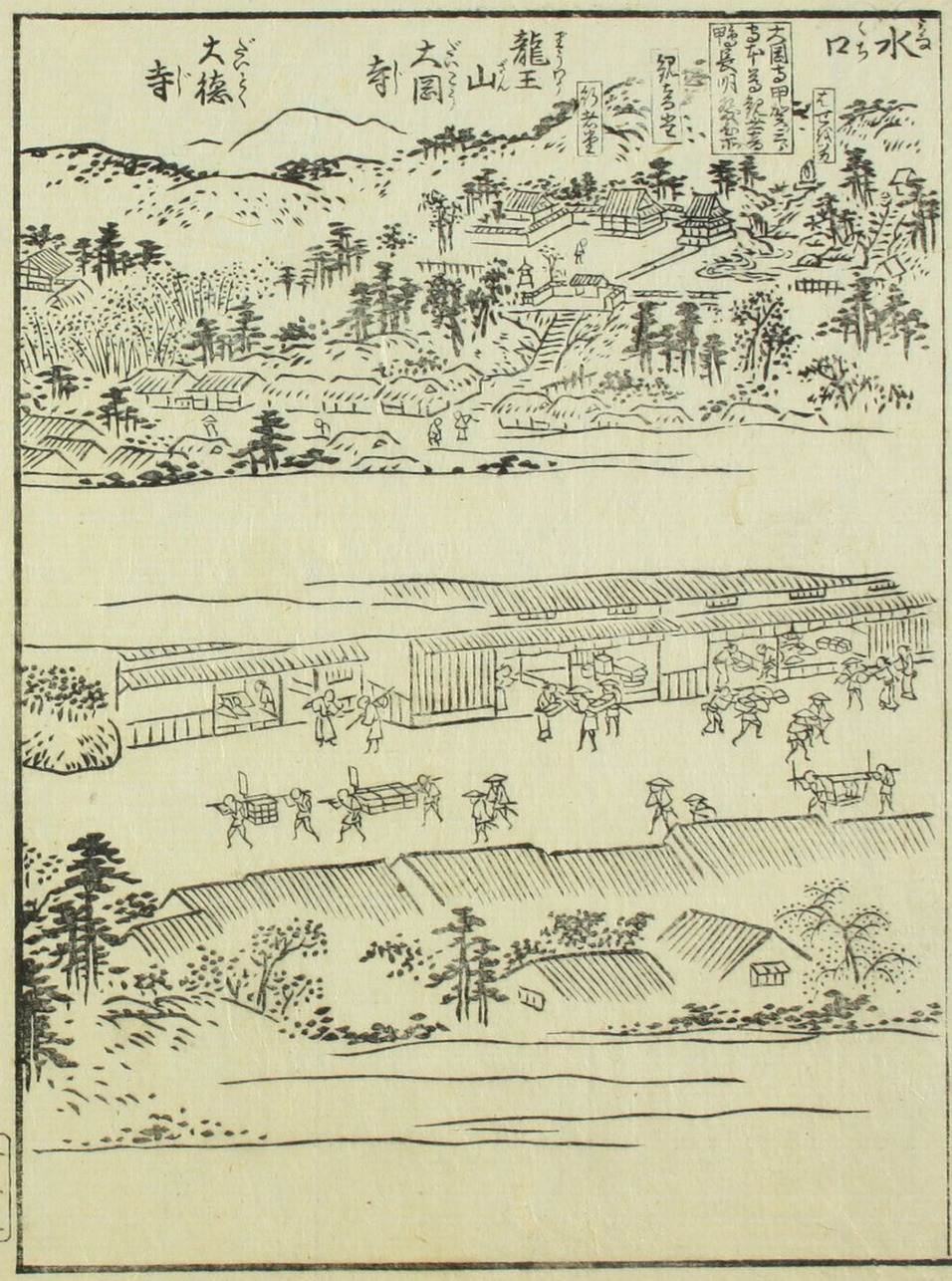
一名石部川原

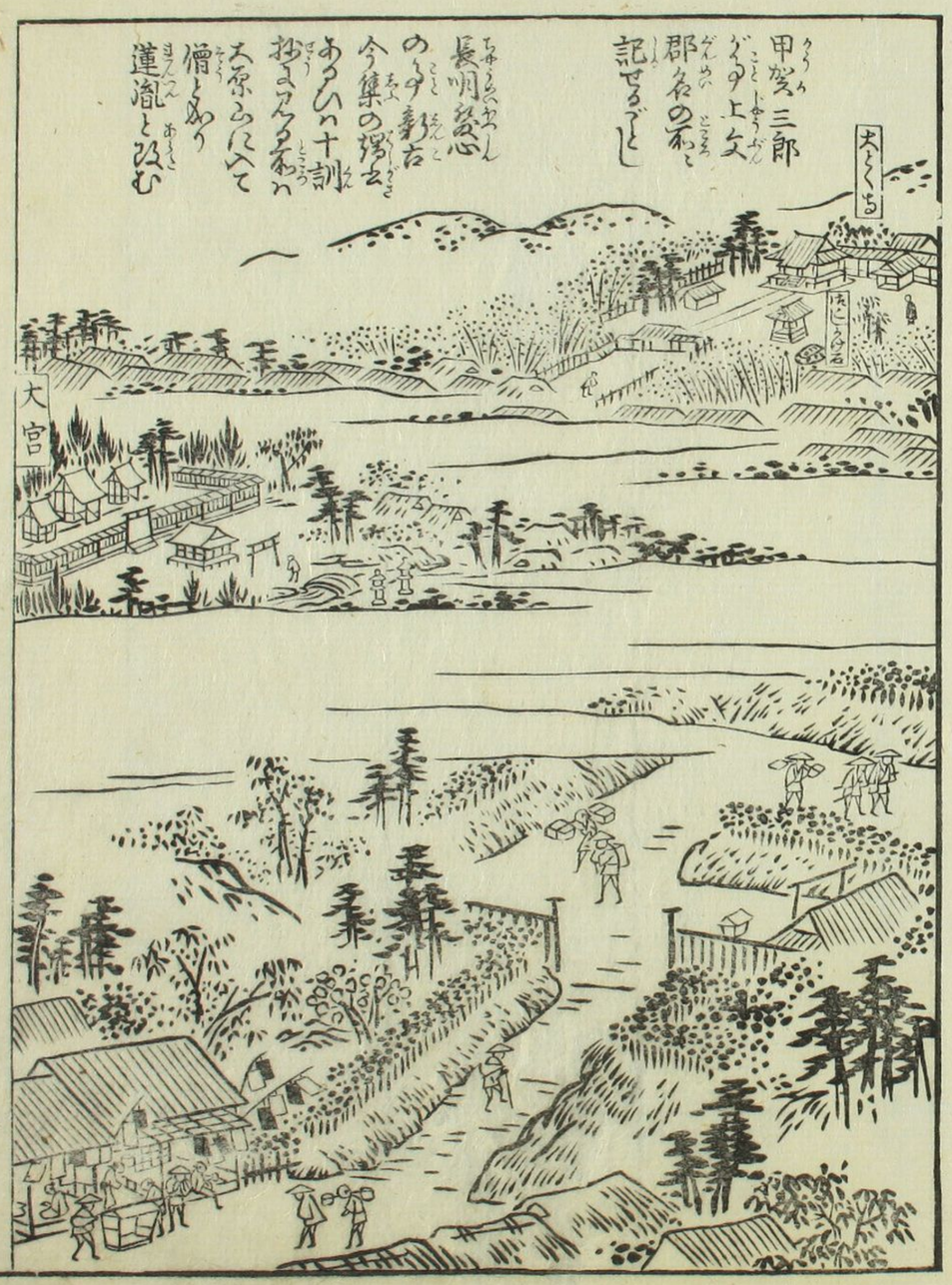
横田川石部川原の蓬生
秋風さむし
ゆくとも
長明

源は甲賀郡大石原の山谷より出て玉山の東へ出松尾川と合て西南へ流れて酒人村の東西にて野田川と合し横田川と合し南より又西へ出く



石部の水うへ
栗太郡
食山の近辺
小江て野洲川
とふ勅使橋川より
これより小西へ
流れて賀村の
へ入る


水口
龍王山
大園寺
大德寺


大くち
大宮
甲賀三郎
ぐの上文
郡名の名と
記せるごとし
長明発心
の事彰古
今集の撰古
あるひは十訓
抄などに入て
大原ふに入て
僧となり
蓮淵と改む

山夏身　此所横川の名酒又は麦とも又仏石を售る茶屋多し甚多し水を汲りけむ偶をめぐらして繞人の目をほゝむ

吉永　○三雲村　江南六角氏旗臣三雲・玉馬之助　○田川　小川あり横田川西の岸あり

横田川　土橋あり○西の方に山あり○梵字岩○烏帽子岩　つゞく也川そこ石多あり

泉村　光廣卿道の記に泉とゝ書そ

夏の日はゆくてゝ夏ぬるきに風ようも泉ゝ多いたしうまろう

北脇　宮の内に八幡　○林口　○馬場先　南の方に金傍山飯道寺あり岩本院ゝゝ俗称あり泉ゝ大蛇山布引山を取

正八幡宮社　水口本戸の外を林口ゝゝ俗ゝ川林の神社へのあり俗ゝ村天神ゝゝ

水口驛　御石筋九丁余　裏所十又丁余

大宮社　塚下の南　○大德寺　浄土宗ゝ細画の上あり　○龍王山大圓寺　ゝ細画の上あり

城山　大蛇ゝゝ伝ゝ甲賀ゝゝ伝ゝ長東大蛇ゝ捕縛ゝ

布引山　岩ゝ危ゝ見ゝ　○正源院　秋葉權現の社あり

名寄　崑ふく雲のたゝてゝぬきとうもむゝ浪る布引の山　長明

栗林　○新城　○小里　○外形岩　○岩神　○今在家

稲川○山口志兵衛重成清泉碑 稲川の古橋を渡て左の方に凡三反斗の石丈の内に清水あり其上に石碑を建る 文曰

山口志兵衛重成者勢州之人也本性住山氏初名盛治號三左衛門其父甚左衛門吉久仕飛彈守蒲生氏郷領鈴鹿郡住山村娶小川左京女生一女三男長曰内記也盛治者其弟也氏郷移封奥州吉久亦從之盛治及十八歲來江府事修理亮山口重政慶長十八年重政及嫡子伊豆守重信右故件旨竄于武州入間郡生越龍穩寺重治辛勤竭力奉之元和元年攝州難波戰重政重信屬掃部頭井伊直孝下攻之河州若江重信一番合鎗先獲首級其身亦被瘡冠兵進至盛治從其役與同僚兩三人擊退來屆重信陣重信得免既而没重政嘆盛治戰功跋涉示感書畀山口氏及其諱字且授家紋於是盛治改稱山口志兵衛重成乱平之後重政赴高野山欲至南海使盛治事雅樂頭酒井忠世寛永五年遇赦帰江府仕幕下采邑依舊同七年重成帰仕重政同十二年重政易簀次男修理亮弘隆嗣其家重成勤仕如故正保四年弘隆奉台命守河州水口城重成從行水口土山之間水乏行人苦渴重成聞山麓清泉湧出盛夏不洞掘井千稲川聳石爲甃大爲行旅之便兼應三年五月十六日重成病死年六十九號即翁了心其後經年土崩石傾其子志兵衛重主頃聞追其志畢修覆之功依价者請記父之履歷固辞弗措乃述其大槩作一絶示之

従役難波揚勇名　稲川療渴本源京
清泉日夜流無盡　洗出忠心一寸誠

整宇主人春常法眼林重民識
孝子山口志兵衛尉重主建之

延宝巳未冬

金毛院 光子内親王御筆の額あり

瀧樹大明神 樹の下に在り 伊佐地○今宿○大野○徳原○市場 伊場 ○前野

松の尾村 右の山上に松尾大明神の社あり 毎年二月上の酉の日祭礼

古山驛 西の入口に多賀 ○一里山○幾理野 元亨の出る所にて幾理明神の祭礼従来人のうむよりぐく有り足い板村の不祭

切板 彩りてかくしぐく有り

田村大明神の社 村の出口に当る明神と額あり 坂上田村丸の霊を祭る

右を天保三年田村丸の末裔田丸の男大蔵の孫刷勇衆に就て其名聞愛の味を停る事に成り

奥紙を染代として彩色を施し其霊を祭り祈願す 近一位田村大明神と額あり 別当あり神宮寺

夏蚕棚に閑猫を乗せ置く ○清水山遠長仲家を討ち其霊を祭り祈願す 勇名を以て雷鳴せり

蚕繭 ○山城栗栖野に蔡里今も其塚あり 多又十口

田村川 橋あり 明神の後 一名白川

田尻野 郷名尤右の地名

解蛇ケ坂 地名由来細図上に記す 右の谷に蟹の塔あり ○猪鼻明神 猪坂明神

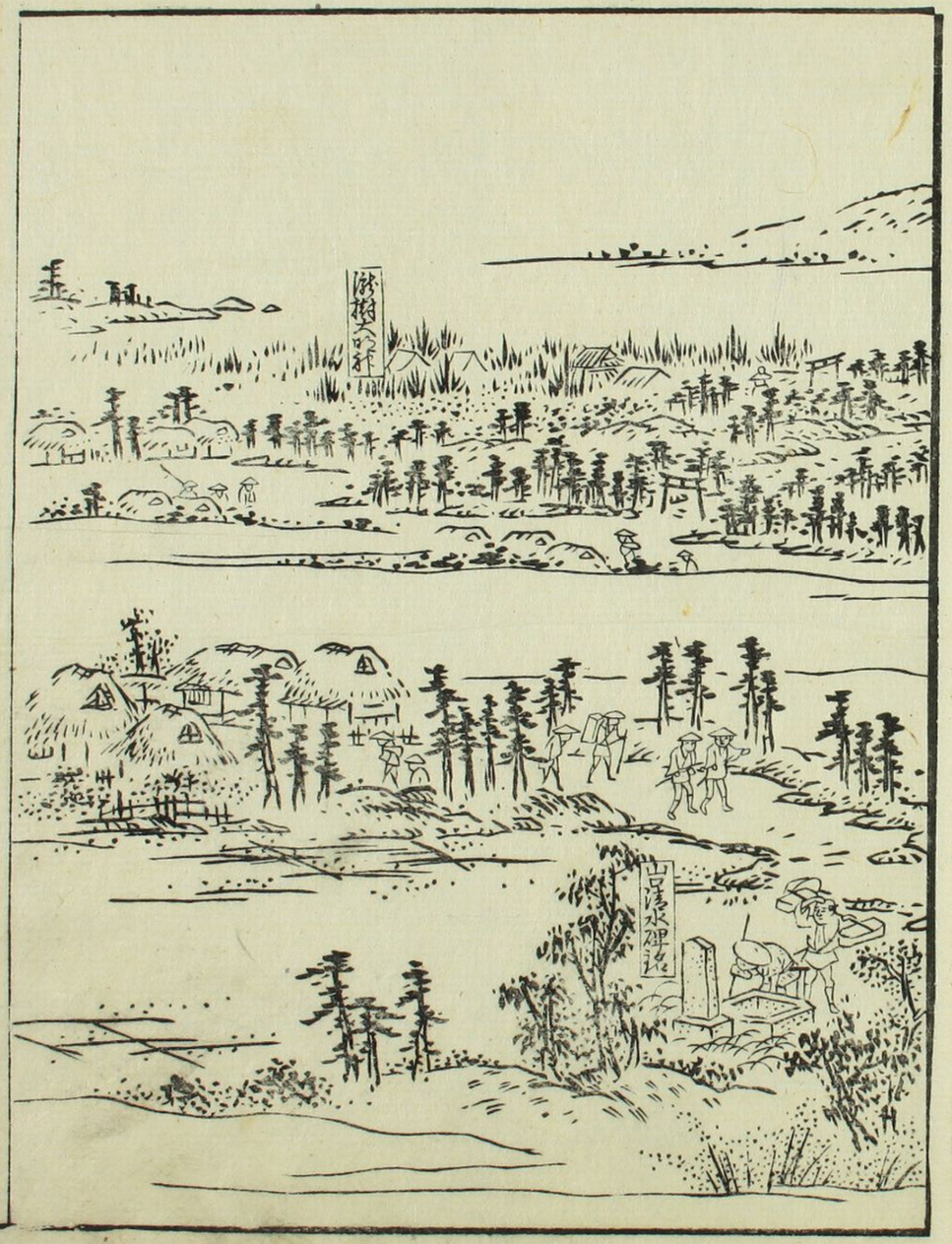
古仏像の愚願和尚開基祐天の名号あり ○擬 ○澤

▲江州勢州国界標木 近年の坂切り下へい迫り伊勢の国境

寛永十二年のふ岩に其名所の塚の塚

鈴鹿山 をべて鈴鹿の山を今の御道を挟んで南北に聳也 去信八百

いさみ川
此川上を松尾川と云一名外川の自川例幣役此り換して鉱原の設有るもとゝ須賀を足へしり
ふさの川
水口境
ふる川


山口清水碑記

土山
さかいてる〳〵
殺氣い曇る間の
ちと
なのめがうる
此混解しがた〳〵
坂とつゞ
きづ坂の下れゆうて
目てく其家後を考るゝ
殺廉坂の下の間ゝちと
ゑ〜されば
百年の
星霜
と絶と
ば其ゝ
壁の横
を設む
るゆを

ちろ〜
今様ゝ
むろ〜の
往ゝ
ゝ今ゝ
遠ひ
て名不ゝ
も異ゝ
わゝ今ゝ
と松尾と
小の方、蛇宮
村ゝ元ゝ
とて蛇宮の
蛇宮ゝ
蛇宮の山ゝ
坂ゝ
こゝを
考合べ〜

八谷といふ鈴鹿官道の間凡廿六町往古は山城宇治より伊賀名張を経て伊勢に入る其なれば此山の内長坂といふをば越えし今の社より二町程林の中へ出る細道也是古歩みといふ所の中なり

秋官家集
すゞか山ふるの中なる君よりもきさらぎにそおそれられけれ

○平城天皇大同二年逆賊鈴鹿に籠り旅人を悩ます事朝廷に訴ふ勅に因て田村丸これを誅す又弘仁年中に上皇と此所に遮る其後延喜七年九月捕鈴鹿山群盗其徒十六人誅之云 昔は樹木茂くれば山魅木客の栖白波緑林隠れ家のさまなりといへる古今の空言なれども今昇平の化あまねく限りもなく此地も繁昌の景色なる まひとへり君の徳沢なり

後撰集
すゞか山いせをのあまの捨衣しほなれたりと人やみるらん

三子山 鈴鹿山の並び 俗三子山といふ 是を古名片山といふて三神鎮座の地也 伊勢の舩人此山の雲のさまを見て日和をうかがふ

坂下村 此ほとりに鈴鹿川橋あり洪水已後山の根を古町といふ

田村社 鈴鹿の坂の中ほどにあり 田村将軍の霊をまつる 是は鈴鹿の山中にあり毎年二月八日注連縄を張て人を不寄愛宕出現の地なりといふ境内のなにがしの社は鈴鹿姫の霊なりとぞ

かゞみ石

○たつうき坂 すゞか山の坂の名なり坂より上八丁

鬱罠
秋されは勢も分るゝ鈴鹿山麓と雪とふれるかこの山

○鈴鹿神社 本殿天照大神荒魂瀬織津姫尊気吹戸主尊速佐須良姫尊相殿にて座す後に倭姫命を合祭りて別号を片山神社とも県主の神社ともいふ 古へ神宮の遷宮を国司より造立ありて斎宮群行の時は此所に頓宮身曽貴殿を構へて勅使の来宮にも此頓宮身曽貴殿を構ひて伊勢路の始なれば御禊し給ふとぞいにしへの頓宮の跡なり 境内より八丁ばかり乾の方にあり伏見院永仁二年春二月火災ありて今の社地に移りしより〇此神主の家より撰へ移す古の南は細道あり是古道なり今の坂の下の続きなりて本陣といふ地名残れり

○頓宮 斎宮群行の鈴鹿の頓宮にて旅のおほきかりし

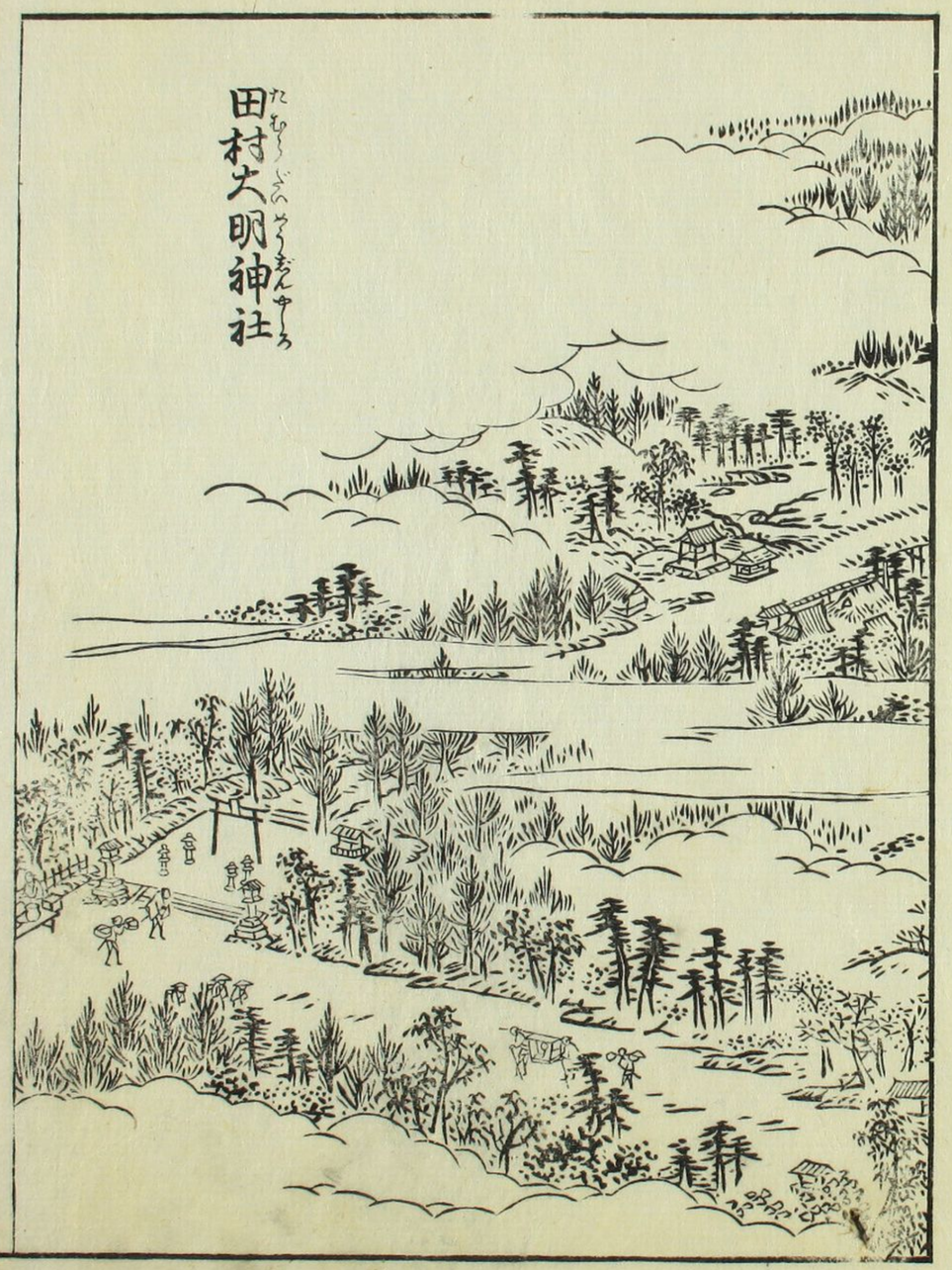
新勅撰集
いそぐともなほたのみなん鈴鹿山苔のむしろも旅のやすらひ

○とくら川 詞花集
五月雨の日をふるままにとくら川八十瀬の波ぞまさるなり 通俊

○橋の弁天 弟は伊勢の海の硯の石
多気窓蛍日昔当国鈴鹿の橋杭にてつくれる やすく堅うしてひとりの手にて代々帝の宝物とせられしとぞ鈴鹿の社のつたへしく鈴鹿の橋杭のなごりを今もかくまつる見も知らずなりしとぞ 皇嘉門院治部卿
いよく鈴鹿やとせひ本造の具丸ましく合せ鹿橋のさまをみつけて鈴鹿の橋杭の弁才天とぞ社宮守あまくぬうしやせどそこらくあらるふ坂の下といふ不の橋杭の弁才天とぞ

田村丸
誅仲成
加茂白太祢
宮祭記云
嵯峨天皇
弘仁元年
之上平城
天皇薬子
の霊ましまし
兄仲成が力
によつて御位
復らんがゐる都
を迂んとを思ひ
よつて勅をて諸関と
ひらゐ田村丸を大納言
として禁中をゐらしむ

上皇大ゐ怒りて畿内
紀伊の兵を召しく
薬子と日輿して関東
に赴き給ふをゑ
田村丸を大将と
しゑ征夷綿丸を
副将として御幸をと
ゐむ田村丸ゑの大ゐ
に拝ゐねと添く加茂明
神と祈り昇殿の関と
これを遮る此ゑ扣ひて
陣戦ひゐふ紙神力の加
りゐるあや賊ゑの軍兵
ゐむ勇く計ひ現じて遂て
仲成を射殺し上皇を
宮に還し奉ると云
後世田村の謡ゑ清水の観音俳力を
著作せしかのゐひゐ


田村大明神社

本社
秋葉遥拝
太神宮
田村川

まろありやがていらうせくおがむよよのつゝの布ゞ天王ゐあり じまづよるくもるき拾遺なるビ
又日蓮ゐ〻うの王ハ伊勢ゐ伊勢ゐ終廉の石橋にて他ゆゆる硯を直ゐ伊勢の海とよば
せ給ひし〻其うゝち今ゐ終廉の社ゐあり石かゝ川のむゝさき世ゐちでゝたりのちゆ云く

橋の弁天ハ一里塚の東の橋をゆにあり 尚関の塔のゝ〻の記ゝ

○岩窟 左ゐの方ゐ大きなるゐ紙切ぬき自然の石堂にゐろ〻ひ内ゐ阿弥陀観音地蔵
を安置し〻其ゆゝゝろゐ清泉斜ゐるゞゝ落る流ゐ法澍の親書と称を

坂の下驛 つゝ〻へハ終廉の山の禁にゝ〻 流坂の下とゝハ流るゐ慶安三年
九月二日の法水にて山川田畑屋ゝとゝ〻を顛廢を依之公ゝゝ修補を
加へられ十町斗東へ宿をうゝゝゝ今の坂の下足之右名足を鈴廉の驛とゝ云

金藏院 仁壽年中慈覺大師の開基鈴廉山護國寺ゝて日光の末寺

本尊ハ薬師如來 壁中ゐ傳教大師感得の三寸八分の尊像腹籠云云
終廉の禁にゝ〻法あの後世不〻〻中真開山貴盛法印とゝハ義眼大師の法嗣なゝ

小女溪 官道ゐ橋二ツあり橋名同じ驛の中祖と東の端とにあり

法安寺 禅宗にて石佛唐申の像あり 焼地藏 当ゝけ村 寛文の比桃之年此地ゆて
石工近國の名他ゆゝ 加茂盤谷の筆もあり

櫃の木 一里山 朝日弁天祠

權現山 弟拾ゝの茶ゝあり古居石垣のゝゝあり今地の字に紙ゝろ
遺ありて名付〻ゝ終廉郡誌ゐあり

四軒茶屋

解脱ゞ坂

世傳云昔此谷に大なる解脱あり妖を化て人を接ぎ旅僧是ゐ會て佛經を説き偽て是とゝ殺し其塚を築く云云

或云昔此谷ハ山賊埋伏して鬼魅妖怪を企ゝ一人と威く物を奪ふ賊と名て盤ゝのゝゝ世ゐ横行をる者なゝ

日本記王朝時代
則賊のゝ是同

山中

雅康卿関東街道記

山中とは不にてかくぎ
もとゝ雪く
ふるこ多
それうと
生けば
山中は
笑家なく
もかくぶし

道の傍の松は撫
の中ぐり木あり松
喬木にくゝ花
ちるよ笑し

羽黒山 関の中ゝより北所斗小ゝ岩ゝあり但し筆捨山なるべし

ちゝみ出を一ゝ忍もいとぬ大石層巒しく幡窟峰石其数を不知ゝ

荒熊羆の栖 ともいふべし

巌中に小祠を籠 則出羽国羽黒山を

古俗のいの権現の勅諚を往昔頃信忠信兄弟不和ありて上洛せし時此石にてゆるゆるありて遥に本国の羽黒山大権現に祈願をかけて其後勅願ありしかば忠信兄弟和睦せしとぞ

亀石 ○ **天守石** ○ **布袋石** ○ **花瓶岩** ○ よさぬけが淵

○ **茶鍋の淵** ゝとの深潭あり其外寿石かぞへるに

一ノ瀬村 平の盛信の古案にも一の瀬とづくもあり ○ **一瀬川** 此水上は板谷川。清滝川。より北川。あづま川名なり皆三神山より流れ出て八十瀬ゝもなり

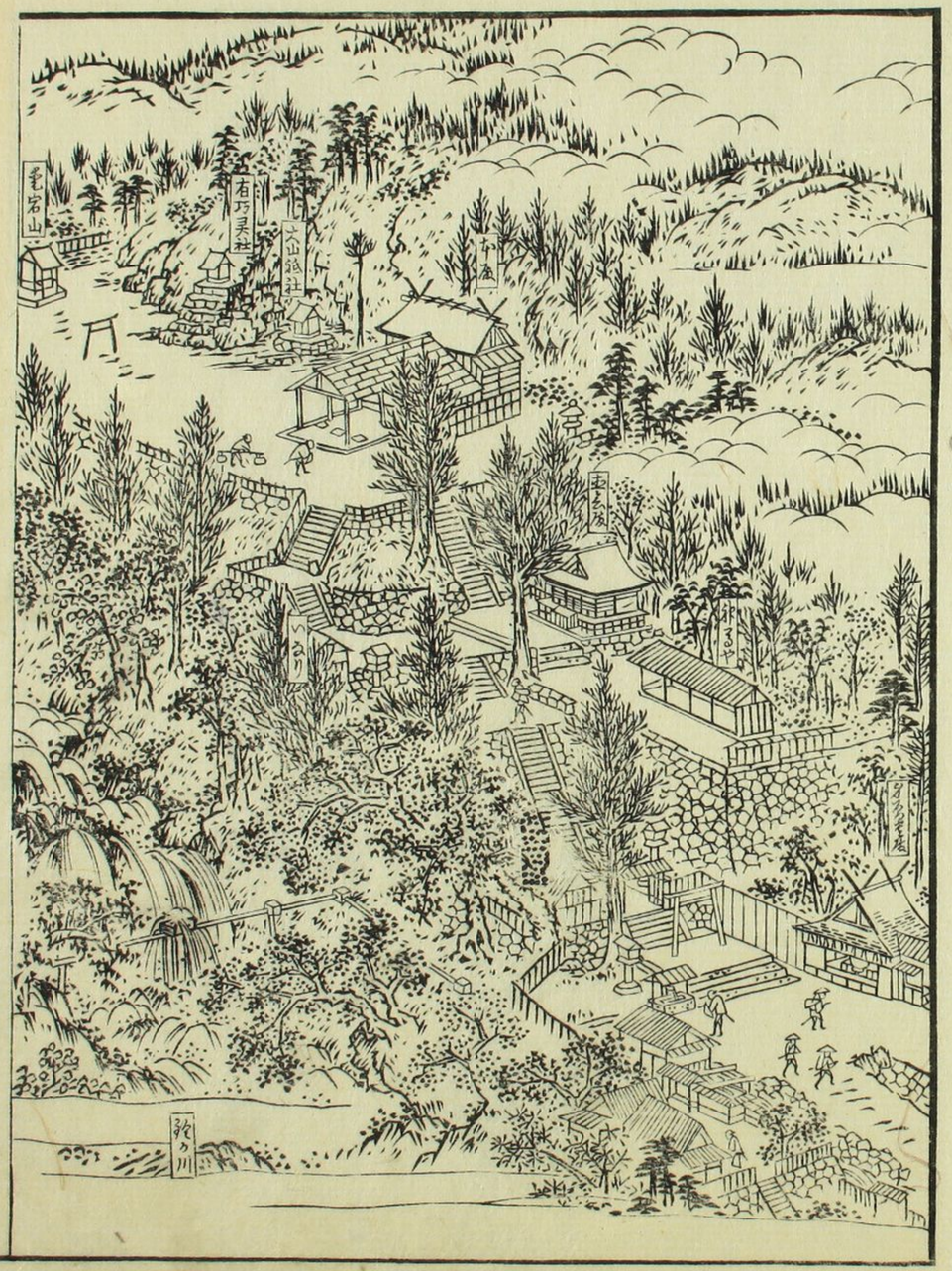
末もひとつにあつまりて一瀬川ゝ麻伏荒川等合て関川へ ○ **大黒石** ○ **恵美須石**

○ **長持石** ○ **ゝろび石** 姿の似ゝるのゝなり

関 今駅宿の名ともなりゝれども

中古戸郡ゝゝ此不人和の間にて細き小路を南へ通ゝ不前の関屋の跡なるよゝ伝ふ ○ **御影嫁塚** 世縁奥より出と ○ **火縄** 名産なり

関屋の夕関の駅西の入口より二三町東と


毛宮山
有巧美社
大山祇社
玉之屋
玉之屋
ハヒヒリ
ヲリヲ
ヲリヲ
ヲリヲ
鈴の川

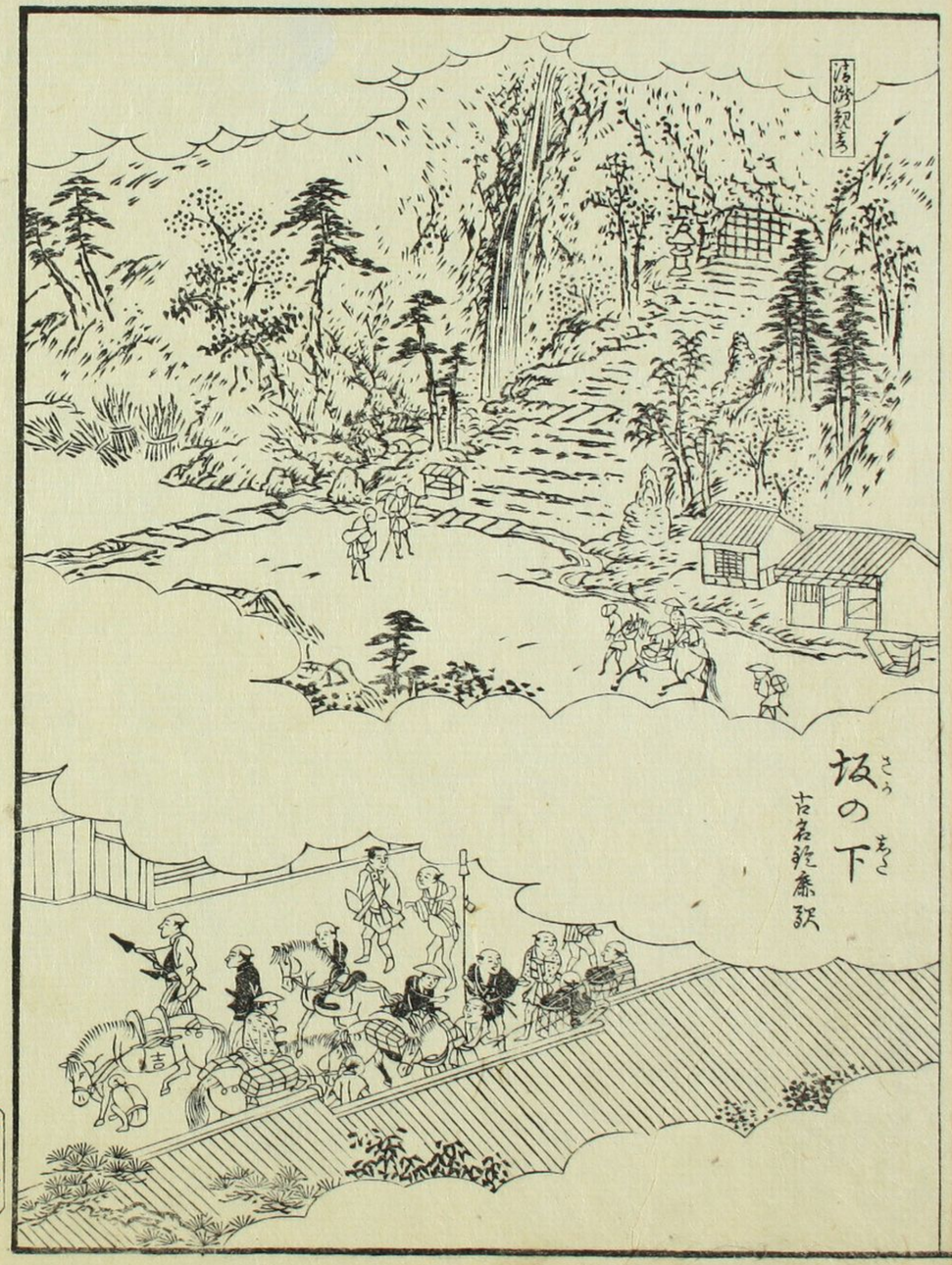
田村明神
鈴鹿峠
鈴鹿山
鈴鹿権現社

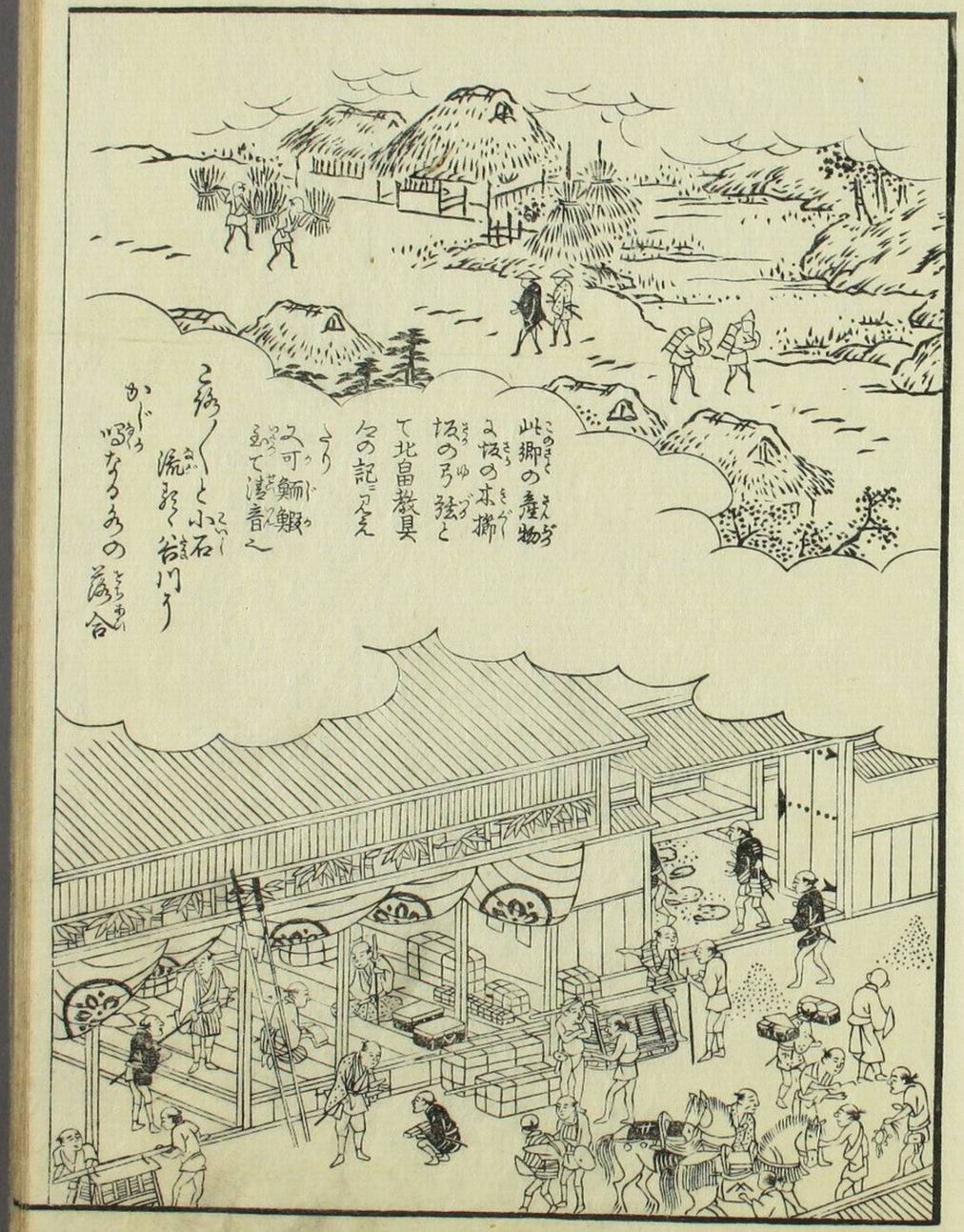
清見原天皇
鈴鹿川を渡
る給ふの圖

天武天皇大友皇子と
龍蛇吉野より鹿源
を經て此所に
給ふ鹿伏兎と云い
是ゝ時ゝ山中ゝ燈
の明人ゝ乃ち忽一人の翁
あらはれて天皇ゝ謁して
我ゝ此山の神大山祇と
案内ゝ添奉れゝ水增ゝ
つゝゝゝ給ふ此所のづゝ
鹿来りて天皇と負ひ
まゐて獣路の鈴を付て

まゐ〜ぬ因て
鈴鹿と号云
此所さるゝと
ゝ乃ち
池大山の神
とゝふ

江州甲賀
郡ゝあり


清游記考
坂の下
古名乾泰訳


此郷の産物
は坂の木櫛
坂の弓弦と
て北畠教具
卿の記に見え
り
み可鮒鰕
て清音と
こゝろくと小石
流るゝ谷川う
かゞゆるなるみの
海合

鈴鹿関趾　捨苅抄云 逢坂不破鈴鹿。〻日本の三関之云 續日本後記曰

桓武天皇の時始て建後醍醐天皇の御宇に関所停止 連歌道へ然撫使等往通しめ給ふ崇徳帝の朝よりあまたびも皆伊賀路へ移る多國史

帝の朝崇峻帝聖武帝天武帝の朝よりあまたびも皆伊賀路へ移る多國史

よりの久しく近江より伊勢の鈴鹿へ通ぜしも光孝帝の仁和二年新道を開れし是始

なり昔の鈴鹿の関は上の方よりあり〻みや坂の下宿のうるれの川の南より関趾墓とつくる

地名なを是後の関屋の跡といひ伝へつくるなり又建仁二年水無瀬殿の歌合長明が記りまうる

ろも鈴鹿の関は今の関宿よりみとまりの久しう関宿の中町より関屋敷のとつゝ地名あり永

保十二年織田右長信伊勢國の関所を停止とする関宿よりある関所なり元鈴鹿の関と九

条領鈔附録に小松内府重盛公の十八世亀山の城主関安芸守盛信武勇をぐれしる

左渓川左近二益と合戦の時此地に新城を築き防ぎ戦ふ元亀四年のなりうつる

勢陽府志に天正十一年八月末侍に新城を築くとあり其ゆゑ月ごうまて年月地

名はかゝ〻たゞうつ返て考ふるに

地蔵堂　九関山地蔵院宝蔵寺とつゝ。亀山畧記云真言流開山應宣僧都也若狭白

比丘尼八百歳自筆に宝蔵寺と記る額あり又宗長紀行の記にも地蔵のそる像

は彩基の跡とし鈴鹿郡誌に地蔵菩薩と記る大月元年の建立にて其後田孫ぢう今の堂は元孫九

年の建立なり勢陽府志に地蔵菩薩 埋存像向 傳教大師の開基其後文應年中焼

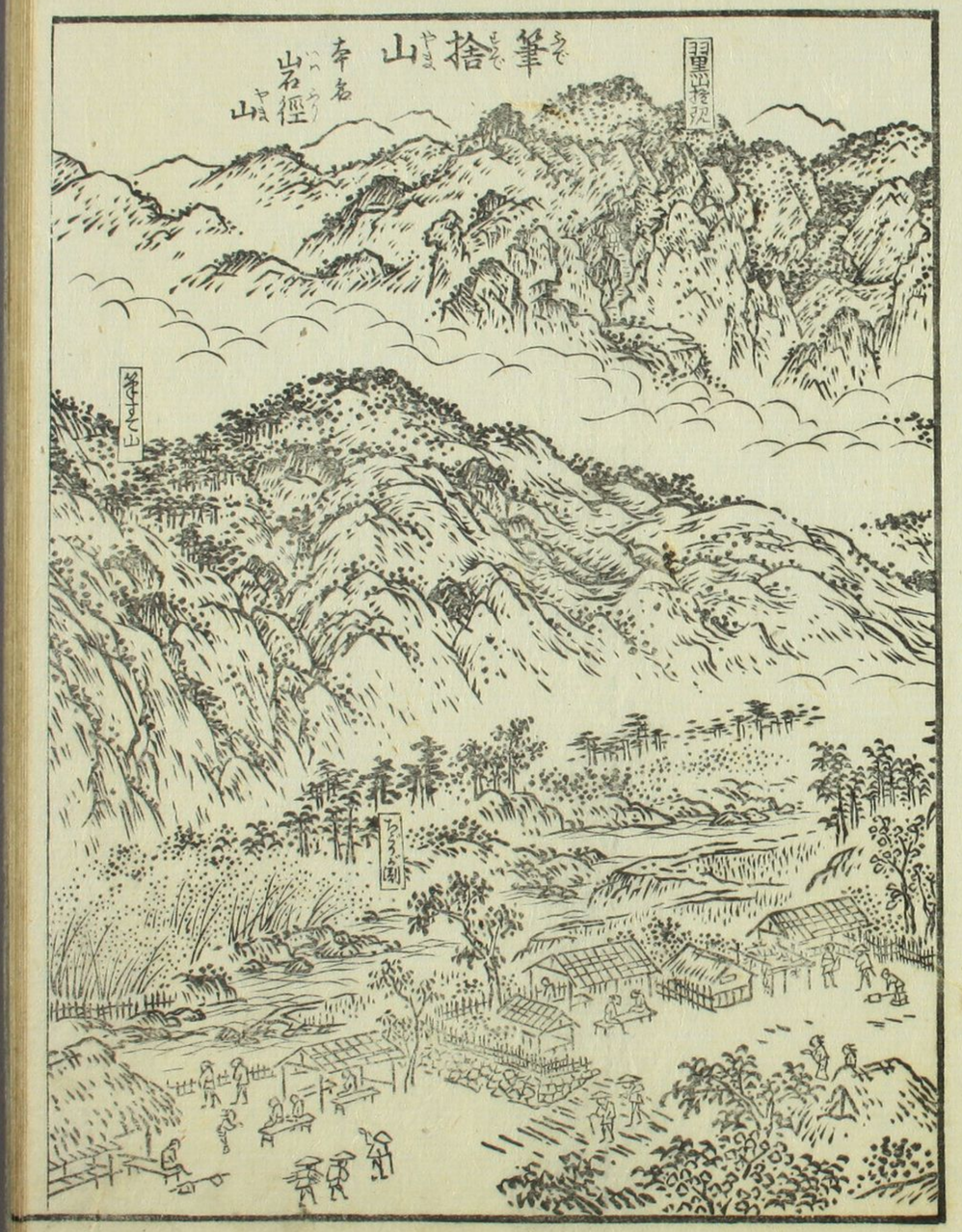
此時尊像焼ぜしを文明年中そる像本堂ともに再興あり此時一休開眼の導師

ともあり後又田孫ありて元孫九年建立なり勢陽府志

えゞり橋

新後撰集　いせの勅使よりもゆいて鈴鹿の関を誠るとて　定家

えゞりもぬこれやをくれ関るゝんうり捨うゝ花のうけるる


羽黒山拾遺
筆捨山
本名
岩徑山
筆すて山
ちろう剛

玉拾岩
ろくべす岩
ろくべす岩
大ろくべす岩
ろくべす岩

此橋い地蔵堂より東町ゞう西南小橋屋玄湾屋敷のりのを其古樹ちうとゝ
エゾゝゝい物又文字のえぞうこぬの言を引てつひてゝうちゝ紅べ〜〜緑夷人の越
とさ〜〜るゞ寸ひ出るゝもゝ又西紀の拙ゝ切ゝる跡の杉苗より芽を出〜〜うゝ
ゝゞ勢陽府志の説も信ゞ〜〜

久徴村白石明神 此神もゝ〜〜小松内大臣重盛公の御ゝ姿盛ゝのゝて此ゝ流れ
ゝうゝゝゝゝ〜〜ゝ国の孤ゝう堀ゝゝゝゝ鄭を
国長門守ゝゝゝも此ゝゝゝ

御新嫂塚 国長門守妻の墓ゝゝゝ国氏ゞ家老
服若彰ゝゝ遠ゝ神戸氏の女ゝゝ

○**城山** ゝゝゝゝゝ〜〜今古井の跡ゝ古屋
ゝゞ出ゝ

○**三日城** 信長の家老丹川監物
三日城ゝゝ〜〜ゝゝ

和琴の橋 上古ゝう天ゝの宝物ゝ玄上又玲瓏六弦ゝゝ和琴ゝゝ其琴ゝ
此玲瓏の橋板にて制ゝう成又今に其跡を琴の橋と号ゝう禁秘
抄云累代の宝物ゝう但毎年御神楽ゝ用之○江次第云和琴玲
瓏累代帝王の宝物ゝ又平家物語にも又ゝう南宿の彰橋ゝ中卿とのゝる
のゝ小川ゝ架ゝ橋をゝこのゝ〜〜ゝゝ又相の未島ゝゝ田の宝ゝゝ南の雲明神の森のひゞ
玲瓏郡絵ゝ出ゝう又諸の跡路ゝゝ今社来の南田まの通ゝゝゝゝゝ地名ゝ
甚ゝ箱の川の橋ゝ又紀巴の記ゝい一ノ瀬の命天橋のゝゝゝゝゝ多ゝゝ窓宝ゝ拠ゝ
引ゝゝゝゝも琴ゝの橋い此地を思ゝゝゝゝ再びゝゝに出を

玲瓏川相の古木の丸太橋 此和琴ゝ建武ゝ来紛失のゝ〜〜数有ゝ紀ゝゝゝ

俊成

川上山瑞光禅寺 寺内ゝ権現柳ゝゝゝゝ

亀山雪紀云此寺ハ曹洞宗應安年中の開基寺領六石三斗中興開山い

関地蔵堂

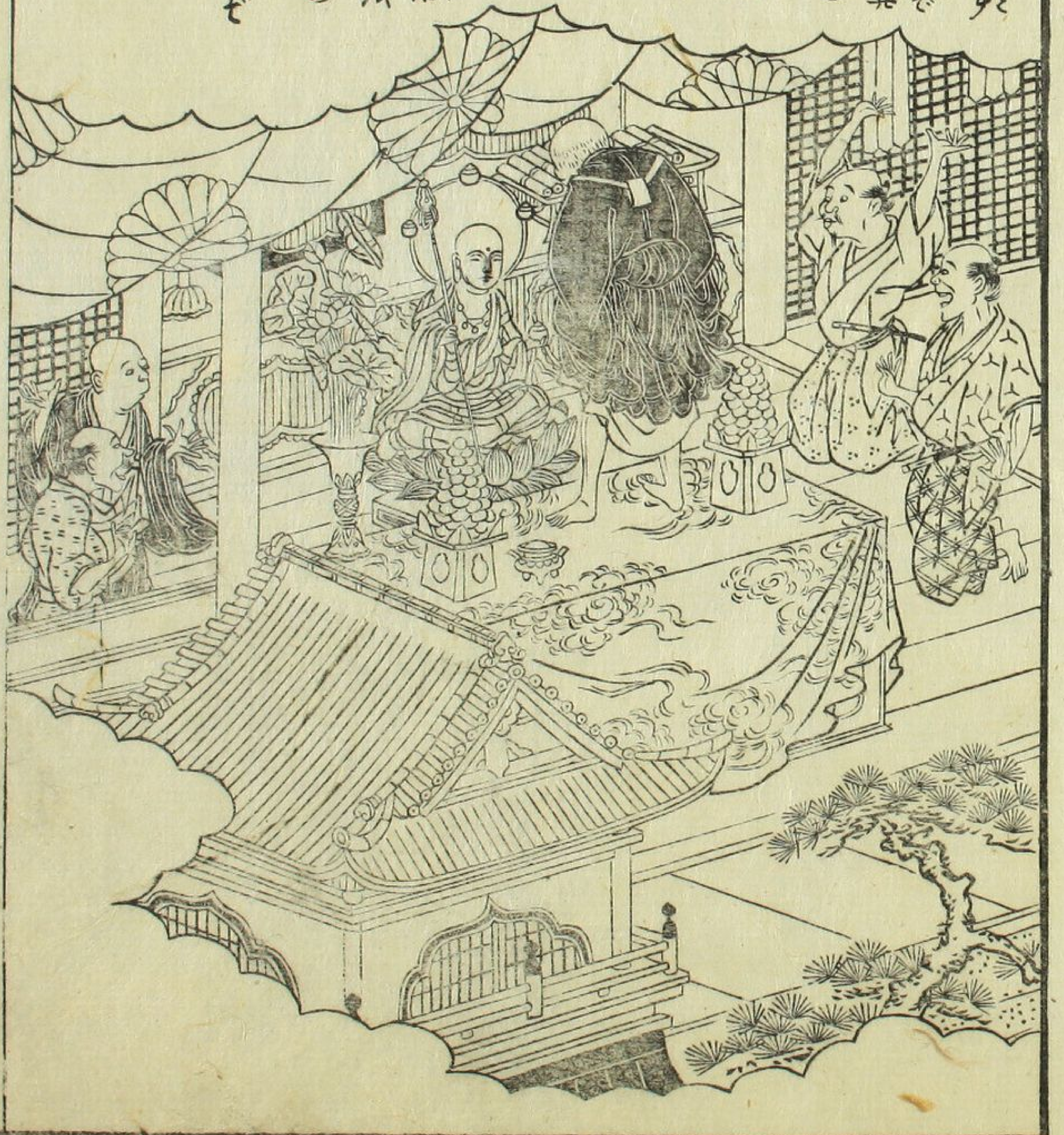
勢陽雑記云
文明年中尊像再興の時往来の僧一休和尚を招〜て開眼の導師とす其偈ゝ曰

釋迦ハ過ぎ彌勒ハ未ゞ出ぬ間の浩き浮世ゝ開眼地蔵

同異本開眼の話

一休の関東下向を見うけて彼開眼の
導師をたのまれバ一休それで得て佛
尊像の一體甚ずのあがりて佛
のかしら人まくらに小便さしそそ
開眼ハ是なれとて後ぶも
見むきしてたち消し人々ハ
是をなげき騒れて水を
そゝぎ清めけれバたちまち
其人々ハ物怪つき頓ウ
てがきちみちし心となりん
ひたるハ天下の老法師の
我田をひきよせたる物
となりてすぐしたるぞと
うけくひさるる面も
そう人々ハ是ゆ騒ぎき
あやしく彼和尚の
行ひとぞ

りしてまつくのゆ
をついて験さるれば
和尚このたびハ獲鼻
を解て是を地蔵の
首に纏ひ盃すべて
何なる是しる効
許おじくは思へども
それの奇特に
物らじして数への
おゝくに纏ひし
うが物怪ハ去りね
かくて後和尚帰洛
の時其まとひさる
解き是をいまの
さまぞうけ盃ぞ
みるとぞ



豊屋和尚之鈴鹿郡誌に瑞光禅寺旧は関駅の會下村万松山永明寺の別院なりとて境内に関長門守源居関万徳の居地之永明寺焼亡の後此地に寄附せらる會下村七十石余の寺今に此寺の支配なり永徳年中之棟の古鬼瓦あり又天正十一年関宗一盤繞の古画あり又天正二十年の古牒あり○勢陽府志に瑞光寺は川上村にて関の中町より二町ばかりなり今は絶て寺地計なり
○按るに川上村にはあらじ湯津盤村なるべし

湯津盤村
前条に見合すべし今人家なし

湯津盤の森
鳬らく川をかけてとむ月のゆつもれもりにけそさやけさ　法眼玄清

湯津盤の森
関駅の東二三町ばかりなり今は跡ありて小社の森を称をようて小社村ともいふなり古はありし

清岸山福蔵寺
滝山罟記に坂本西教寺流織田三七信孝の香花所にて家臣大塚長政がこれを建てるなり

追分
東海道と参宮道との追ひなり　大なる常夜燈を建つる参宮道なり

関川
仮橋は九十間あり此橋九月より翌正月まで関の木崎村が架る　貞享二年乙丑十二月の定めあるよし書を

古駅
ふるまや村にあり　鈴鹿郡賊に古厩と云ふ神宮幣馬のやどりし所也　名残あり　傍に包井とて今なる寺を建て宮造りのおふれたりしは即ち神るの家なりし印にて神いまはあらじ当村と楠原村との間鈴鹿奄木郡の境なり　○楠原村　此村の東小川あり水上は同郡福徳村の山奥よりながれ出る　○天神社　林村にあり　延喜式鈴鹿郡十九座の中志波加支神社といへる是なり

林口
古名松葉　吾尾といふ　明応中林誠中守祐紀の城跡なり

観音堂
大同元年の草創といへども天正二年滝川一益兵火にかかりて今は邑

中縄
沫然慶長己未の古記に元和二年丙辰城主が此村を置年貢赦

免の地之
この村より西南の方に山岩塔山嶽あり　伊勢国中の名山なり

椋本
中縄の南の方にて経東の大路は安濃郡を北へ若出椋本は安濃郡なり出てあまりく東おし小の方よりは又奄藝郡之菅出辺よりあの松原へ経東してなる　村中に江寺とよべる寺の庭に大なる椋の木あり　里の名ともなる此樹なり

片渕城跡
椋本東西の村中に片渕とて菅坂郡関所なし　跡は本櫻来に詳

高野尾
蕎鉞尾とも云　其右には此村に天王の社あり祭る神素戔嗚尊の事が号けしもや中比は高野尾と云るも由あり

豊久野
恵日堂記に云　雄略帝の御時丹波国より豊受大明神を勢州へ遷し奉る時鈴鹿の神戸よりして此野に行宮を作り休らひせ給ふ御跡なれば等由気野ともいふ　トヨウケ　トユケは通音の即今の御名の二町ばかり東にあり　其古道あり継古を一里まがりの松などよりしといへり

銭掛松
高野尾の東の曠野に年ふりし一株の松あり是即是なり

くるまや
せき川
ささなみ

関の追分
東海道
参宮道

いふ古神宮行宮の御跡をうしなはざるやうとてしるしの松とて人
て小祠もありしが小祠も亡て松のみ残りたれば人々此に来りて
古神宮を遥拝し御供料として松の枝に銭をかけて米穀の
さゝへと祈りしより此松を銭掛松とは呼り○又伊勢國度會郡宮圖帳殘
篇曰豊國野比呂字食神霊者豊斟渟尊之比佐間字食○是をもて按るに
昔此野に豊斟渟尊の社ありしが後此社のうせしを其跡へ松を
植て銭掛松とよびしなるべし
両説の内圖帳の方まさり味あり明應七年ころほのうちあなりし後の考ふるに今の往来のあたり一身田山内籾川
羽鶴老人銭掛松の一説ありて其意を備ふ優の文なり継り音節調子あるども其古人
の付る名みて其意をすてまつられしを知るふともなし

野崎

このむら舊は山田井也 和名抄に田井とあり又延喜式神名帳にも多為神社とあるは即山田井の御廚八王子と云は是之
此里今操射郷銭の店多し

土岐の百塚

むま塚とも云 南方記傳に南朝正平廿四年小畠内大臣顕能土岐大膳をまづ兵を伊勢國に合戦して土岐が兵利軍せるといへり此所の小字ありし
田村西の入口一町斗西の畠の中往来の大路の北なる塚あり むま塚又土岐左馬の塚ともいふ
楠とたゞむの木とが流れしにうへより○土岐大膳ますます康政まま窪田にて右馬頭より大膳まま
うつりさる人あれば馬塚の義もあるべきなり

窪田

此村の内馬場といふる町の南の田地の字に政所あるひは城の内などいふあり○東鑑文治
三年の佐々木文に窪田の庄地頭は國賊家司廣元とあるをみれば政所の南村なり

ありしは文治より前のことなり此南の山際に昔光明山祥若寺とて伽藍の焼跡あり

光明山安養寺

本尊阿弥陀佛 行基作 十王堂あり 往昔伽藍地にて行基菩薩の開基也
本福寺佛通禅師再興して其後真言の光賢阿闍梨に此寺を譲り文禄の頃破壊して今小地なりといへども其跡のこりて真言僧住持せり○一説佛通禅師は光明寺にゆづりて浄曾
郡明野がありし住持せり寛中に神明の辺に寄りより古神宮来語の実跡を知るものを春しやり
浮孫を濯しむ其因縁は寺にもありとか尚明暦の条に詳なるを

六大院

六大院村にあり後柏原天皇勅願六院を建て寺領百石を附せられしが慶長年中安濃津恵日山観音寺へ六院ともに移し今は大宝院の菴室あるのみ

空也堂

冷井山西念寺 此村の東にあり これを守る家三又戸あり冬に至ればかねを
諸を唱へて鉢和の修行に出る 京空也寺に同し上人自作の像
甚古物にて錺口にかたわれを証とし又八ツ股の鹿の角と什物とせり
縁起あり委くは京都空也寺の遠からず平定盛の故あり紀ニ此門を持し人とは別あり
毎年十一月十二日法事を行ふ

坂部村

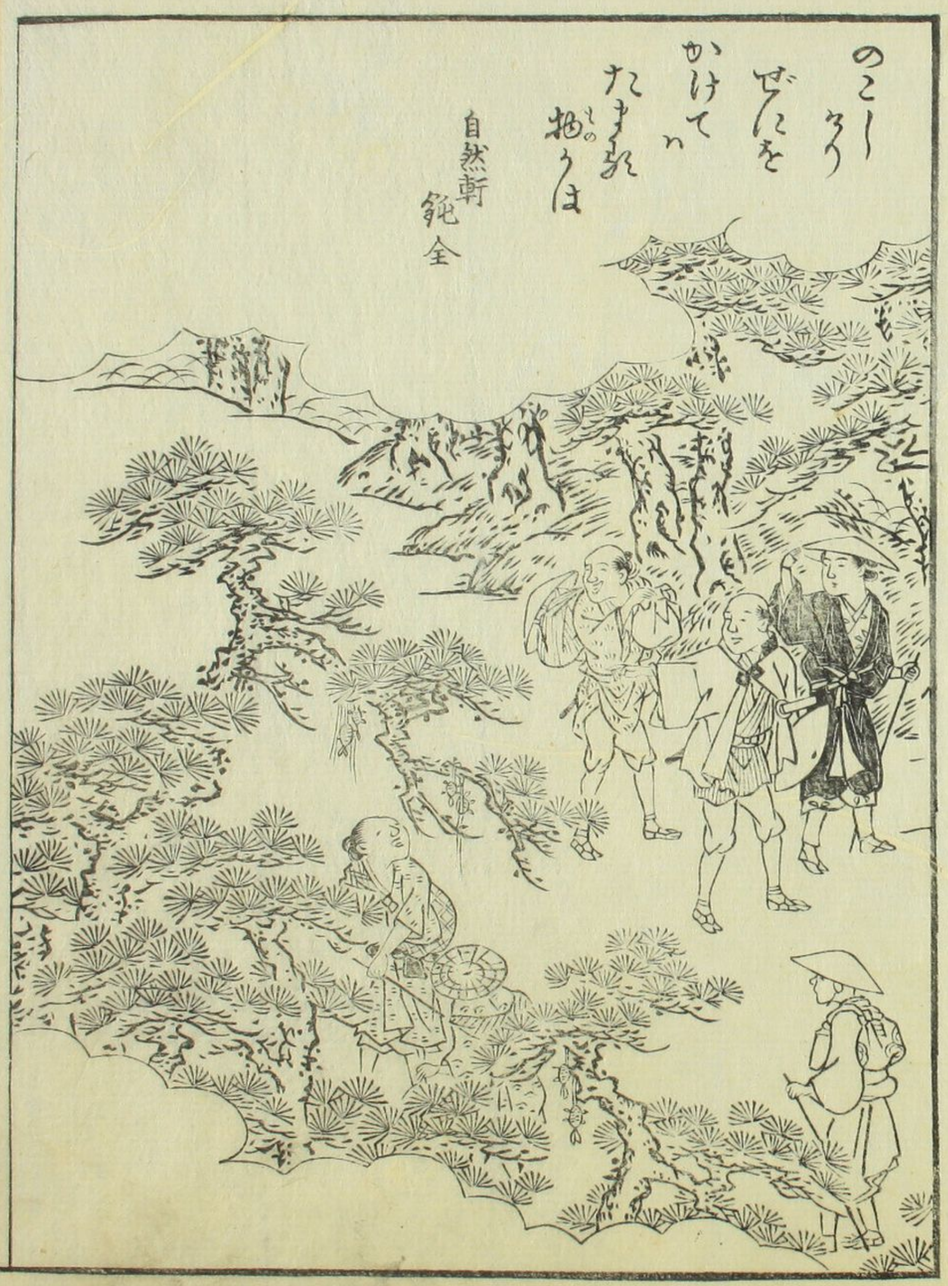
此町の村より東にてこれも窪田村あり一身田の標石あり

倒楽洲齋塚一宮

坂部村より大路を二丁計南東石の小橋あり是を倒楽洲橋とも礼禊手橋ともいふ 昔斎宮下りまと
時倒として此川の洲にて水禊し斎殿へ入らせ給ふといふ今は畠と
なりて斎殿の跡なこの橋より一町計東田の中に塚あり
の杜あり里人よめ塚とよびて俗諺どもありこれも斎塚なるを

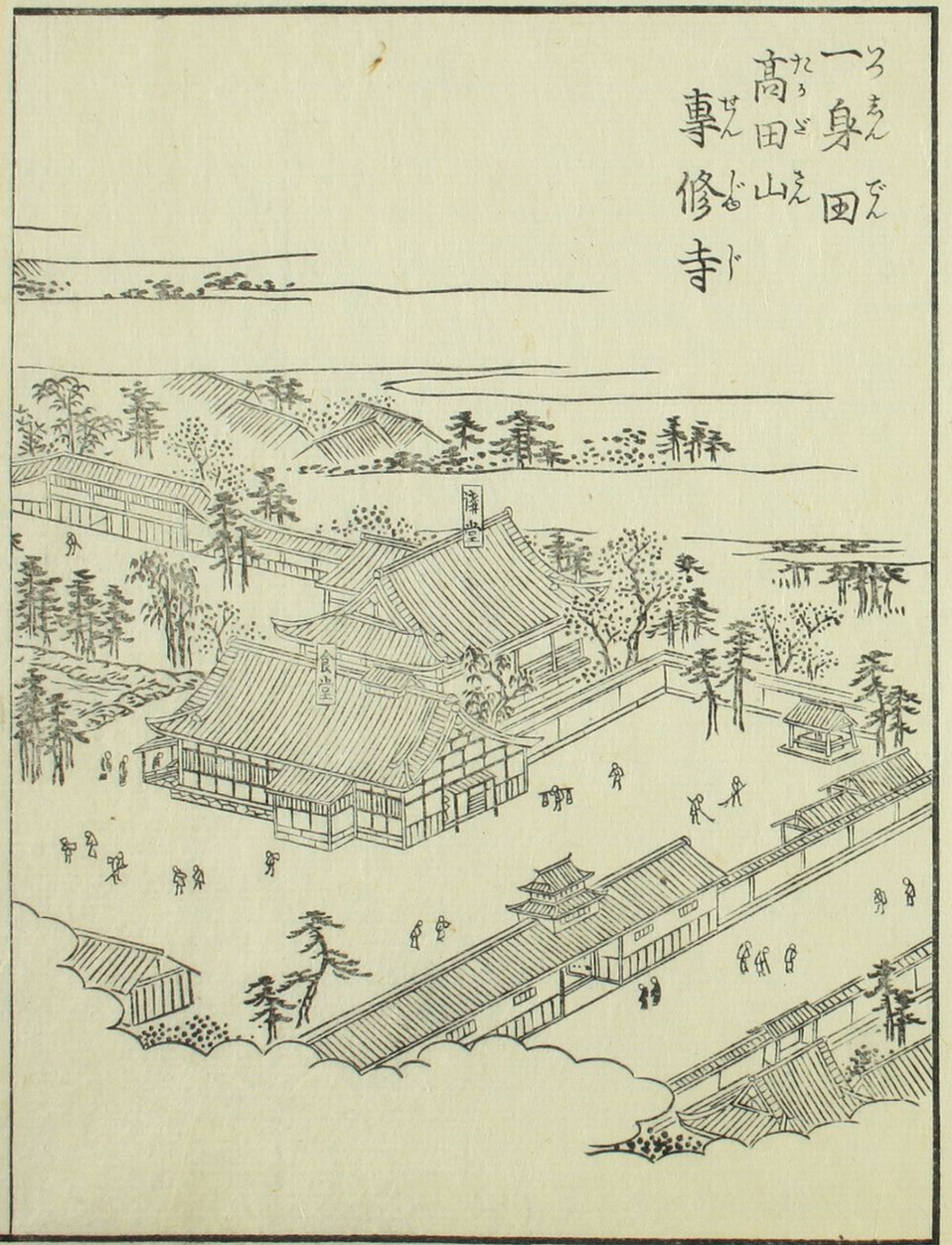
二ノ三十四

豊久野
銭掛松
ぜにかけまつとつよ
まらぶちをいく
らもかけた
ゑ
ゑ
ゑん
ぶう
なしみ
かた
ち


のこ
ぶ
ぶを
かけて
たまを
拾ふは
自然軒
鈍全

訛り橋ゝ二所いづゝ某屋村の西の入に小の方よりあり田の中ゝ森あり
元宮注田八郷の一の宮うて神名帳竜蟄郡事忌往とも足ゝり名
母の額り春日とあるゝ後世の
謬り〳〵右彩川氏事忌考ゝ委〳〵

一身田高田山専修寺　下野流一向宗の本山にて本堂北四間四面
祖師を安置を傳ゝ十八間四面の堂ゝ阿弥陀如来也檀金善光寺同
高田とゝも下野国ゝ有る家の名なり往昔法佛上人とヤ
くるゝ下野国の産にて国勢をもとゝ人心〳〵が深く親鸞上人を
帰依〳〵剃髪〳〵て真佛とゝ唯授一人の口決を上人ゝ得て一向専修
専念の旨を弘め佛寺を創立〳〵高田専修寺とゝり法佛上人
より八代ゝ下野国にあり名が第九代大僧都法印真恵ゝ定顕
上人の法弟にて中国佛法の大願を記〳〵加賀越前近江等と
経歴〳〵て伊勢国ゝ至り先皆く小を化度〳〵初ゝ朝明郡大矢
智村光明寺に居〳〵其後三重郡小松村中山とゝ石に寺院を
建立〳〵て移住せらる然るゝ竜蟄郡黒田村誓願とゝ者急り



山門

其二
本堂

招請ゆて一身田に移らる干時寛正五年甲申上人卅一歳
親鸞の由緒ありて若親鸞上人系宮の府此地を入江の磯に
建移し白鷗ありて荒れる之を来る浪の音を如去広尼くの
依之識識の霊蹟なるを以て永く住居し定免らる寛正六年乙酉真恵卅二才
下野國高田専修寺を伊勢國奄藝郡一身田に移し移り是より一身田を寺とし
野州高田を為基の霊地として掛不
後土御門流勅願所として宣旨被下置如左

高田専修寺門流事

如先々相續可被衆生海度有其外諸國門徒可有進退之旨
天気不候也尤之以状

文明九年　　真恵法房　　右大弁判

又信長公勢民紀入の始南寺十二世尭恵上人と甚睦くして勢州平
均の謀ると謂ぜらる依て南寺へ書送る不の禁制の札如左

高田専修寺門弘　當寺境内不可陣取事
放火之事　右之條々於令違犯者可為厳科者也

天正四年　　信長判

此村の名代一身田と云い三代実録元慶三年丙寅六月勅参可國播磨郡荒廣田
一百町賜函之内親王為一身田これ則ち考るに一身田と云ふ荒田なり
又勅旨田地の名と云ふ荒田を墾て一身田を為す荒田を墾て其一身
境内を嫉妬梅と云ふ新田を墾て不後世地名とせしなるべし
三軒茶屋　平野村の出郷なり　○中野　大乃已所村の郷く
大乃已所神社　中野の森の中なり　今英素女大明神と称せり　郷名改一口
式外の神なり
大部田　上浜下浜　津の所でき小の入口也　右名を小丹と又雄丹と云東南海浜
小丹浦　或い鳴呼見の浦と也　順徳院之御制歌
ゆるやかに雲の芝砂の白之日ゆけしなひくを社の風
勢陽府志を志ての國の名を以て當國飯野郡多口麻績神社の傍に出せり
按るに三ヶ所の青通にて ヲニの浦のみなるべし　尚考之べし
塩釜明神　塩屋と云ふ所あり　延喜式神名帳安濃郡小丹神社と云
るに更也　奮記を景行天皇四十九年八月癸酉不祭社記を
詳也

伊勢參宮名所圖會巻之二終

二ノ三十九